

## 2つの三世代の「秘史」

E.チメッドツェレンの「三世代の歴史」と

息子の J.ボルの「私の母 思い出」

今岡良子

### 新しい資料の到着

2020年9月末、ウランバートルの J.ボルからメッセージが来た。

モンゴル国営放送が、「Зууны 100 эмэгтэйчүүд」（「今世紀の100人の女性たち」）という番組を作っていて、自分の母で、モンゴルの女性史研究者の E.チメッドツェレンも選ばれた、という内容であった。

J.ボルは、息子から見た母 E.チメッドツェレンを語るために、番組に出演した。その時、母の書いたモンゴルの女性史が日本で翻訳され、紹介され、出版の準備が進んでいるということをディレクターに話したところ、その日本人の翻訳者から2分ぐらいのビデオメッセージを送ってもらって、番組の中で使いたい、という話になった。それで、J.ボルは、筆者に依頼のメッセージを送ってきたのだった。

2020年5月に Covid19 による遠隔授業が始まり、Zoom を使って授業の内容を自撮りし、動画を作ることを覚えた筆者は、E.チメッドツェレンの2冊の本、1973年に発行された『モンゴル人民共和国における非資本主義的発展の歴史に関する諸問題』と1983年に発行された『モンゴル女性の知識に関する伝統と進歩の問題』を紹介した。特に、後者の本には、家畜の恵みを自分の手で加工し、生活の豊かさに変えていく素晴らしさが書かれていることを若い女性向けのメッセージとして伝えたところ、番組制作者がよい内容だと評価したという。

その番組は、すでに放送され、J.ボル自身も見逃してしまったそうだが、ディレクターから動画ファイルをもらえたら、筆者も見せていただけることになっている。

このテレビ番組の中で使った資料を J.ボルは筆者に郵送するつもりでいたが、Covid19 の感染拡大により、2020年2月の時点でモンゴル政府は国境を閉じ、モンゴルと日本の間で封書や小包が送れなくなった。それで筆者の夫が資料を受け取り、日本に帰ってくる時に持参することになった。しかし、月に1度ぐらいしか飛ばさないモンゴル航空のチャーター機のチケットはなかなか手に入らず、夫が搭乗できたのが、2021年の2月になった。車で成田空港に迎えに行き、帰りの車の中で、筆者は1年越しの資料をようやく目にすることができた。



## 2つの証明写真

その資料の中には2つの証明写真があった。1つは、北京大学大学院時代の学生証があり、院生の頃、33才の非常に痩せた顔立ちであった。

もう1つの証明写真は、1985年に取得した図書館利用カードに貼られていた。カードと言っても、手帳ぐらいの大きさである。その右上に貼られた写真は、60才を越して、ふくよかな顔立ちである。この2枚の写真は、同一人物と思えないぐらい異なっていたが、筆者は初めてE.チメッドツェレンに出会うことができた。

図書館利用カードの写真の下には、印刷された項目の横に手書きのインクで、氏名などが書かれている。モンゴルの Овог オヴオグは、父親の first name を使う。彼女の父親の first name は、エルチンボー。自分の first name はチメッドツェレン。エルチンボーのチメッドツェレンというのが、彼女の氏名になる。яс үндэс Яс・ウндэスとは、エスニックグループのことである。そこには Халх ハルハと書かれていた。ハルハとは、モンゴルのおよそ9割を占めるマジョリティーのエスニックグループのことである。

E.チメッドツェレンがブリアート・モンゴル人であることは、よく知られている。モンゴルを知る人は、ドルノド県出身と言え、たいてい、ブリアート・モンゴル人ではないか、と思うものである。社会主義の時代、身分証などのエスニックグループを記入する欄には、少数民族であっても、ハルハと書かれたということを知ったことがある。E.チメッドツェレンの証明書で、ブリアートではなく、ハルハと書かれていることを確認することになるとは、思ってもみなかった。

## 2つの手記「三世代の秘史」

資料の封筒の中には、昔のタイプライターの活字で、E.チメッドツェレンが書いた「エルチンボー・チメッドツェレン 私の三世代の歴史」と書いた3ページの手記があった。自分の祖父、父母、自分に至る小史がまとめられている。最後は、1978年12月19日に「歴史の真実を記した。」と結んでいる。

もう一つ、プリンターで印刷された息子J.ボルが書いた「私の母 思い出」という5ページの手記があった。先のテレビ番組 "Зууны 100 эмэгтэйчүүд"（「今世紀の100人の女性たち」）で母について語る内容と一致していると言う。母の書いた三世代の歴史を下敷きにし、母の祖父母、母の父母、母についてというように母に至る三世代の歴史がまとめられている。

筆者はこの2つの手記を読み、これは、E.チメッドツェレンの祖父から本人に至る「秘史」という言葉を思い浮かべた。これを翻訳し、この研究誌上で紹介しなければならないという衝動を覚えた。なぜなら、E.チメッドツェレンの父エルチンボーは、1930年代の粛清の犠牲者で、E.チメッドツェレン自身、冤罪で粛清された遺族の長女として、貧困と飢えから家族を守り、生き抜いたサバイバーであったからだ。

筆者はこれまでE.チメッドツェレンの著作を読んで、彼女とその研究内容について「アジア現代女性史」の創刊号から紹介してきた。最近では、13号の「E.チメッドツェレン最後の著書『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』を再考する」の中で、「E.チメッドツェレンは、粛清の負の側面については一切記述せず、それを書くことを許されない時代であった。」<sup>1</sup>と書いた。また、「E.チメッドツェレンは、ソ連の援助によるモンゴルの非資本主義的発展により、女性の解放が進んだという人民革命党の立場に立って研究しているため、粛清を革命推進のための正義としてとらえ「反革命分子との闘争」に積極的に参加した女性たち、一般庶民の遊牧民女性がいかに革命に貢献したかというところに光をあてている。」と書いた。そして、現在執筆中であるE.チメッドツェレンの本に、「E.チメッドツェレンという人は、社会主義国家モンゴルとともに生まれ、モンゴル人民革命党の政策が照らす光の道を歩き、社会主義路線の終わりを見届けた歴史の証人と言える。」と書いた。つまり、筆者は誤解していたのである。「体制内で出世した知識人」という穿った目ですと彼女を見てきたのである。

2019年9月にE.チメッドツェレンの弟子で研究者のD.エンフツェツェグや歴史専攻の同僚のU.ゴンゴルジャブに会ってインタビューした時も<sup>2</sup>、父エルチンボーのことは話題に出ず、息子のJ.ボルに初めて会った時、「母は冤罪で粛清にあった人の残された家族を積極的に世話し、雇用の機会が身近にあれば迎え入れる勇気のある人だったと誇らしげに話してくれた」が、E.チメッドツェレン自身が粛清の遺族であったということは話してくれなかった。

<sup>1</sup> 今岡良子(2019)「E.チメッドツェレン最後の著書『モンゴル女性の知識の伝統と進歩の諸問題』, 「アジア現代女性史」第13号、P.87

<sup>2</sup> 今岡良子(2019) 前掲書、P.84

Covid19 の感染拡大によって郵送できなくなった資料とともに、この文書は J.ボルの手元に留まることになり、「今世紀の 100 人の女性」というテレビ番組に出演する時に、語りの原稿として一般に公開された。資料を受け取ったという連絡をした時、これは何のために書いた手記かと聞いたところ、J.ボルは、筆者のために書いた文書であると返事をくれた。この 2 つの手記を読んで、E.チメッドツェレンと J.ボルに対し、心からの謝罪の気持ちを伝えるとともに、改めてこの 2 つの「秘史」を日本語に翻訳する許可を得て、ここに紹介することにした。

また、筆者は、E.チメッドツェレンが、ハルハ・モンゴル人中心の歴史しか書かなかったことを「アジア現代女性史」の創刊号の「モンゴル国における女性研究の動向と研究紹介」の中で社会主義の時代の女性史研究の問題点の 1 つであると述べた。

「モンゴル国において多数を占める民族はハルハ・モンゴル人である。モンゴルの現代史は、1921 年の革命後、ハルハ中心主義をとり、モンゴルには民族問題は存在しないという建前をとってきた。少数民族の生活様式に関する文化人類学的調査研究は存在するが、少数民族としての歴史、また、個人のライフヒストリーの研究は生まれていない。中国内モンゴル自治区の東部は、旧満洲の血である。そこで生まれ、日本の教育を受け、満洲軍に入隊し、ハルハ河戦争（ノモンハン事件）で日本軍とともに、ソ連・モンゴル軍を敵に回して戦うことになったモンゴル人もいる。その東部国境で、元々国境の概念のない遊牧社会にいきなり国境を引かれ、突然中国人にされたモンゴル人が一家離散し、ある者は文化大革命の時代を生きた人生があり、ある者は内モンゴル自治区からモンゴル国に越境し、「日本のスパイ」として迫害された人生もある。日本の軍事的な大陸進出によって分断された多くのライフヒストリーは、まだ光をあてられず、モンゴルの現代史の中に位置付けられていない。」<sup>3</sup>と書いた。

しかし、J.ボルによると、母は祖父のことも、30 年代の大粛清についても語ることはなかったという。著書にも書かなかったが、自分の手記の中には書いていたのであった。その要点を J.ボルの手記とともにまとめると、E.チメッドツェレンの祖父バンボーは、1862 年、ブリアート人の住む、当時清朝の領土、現在の内モンゴル自治区ハイラルの近くのシネヘンの遊牧民家庭で生まれた。祖父はモンゴル文字と満洲文字を知っていた。1910 年の清朝からモンゴル民族が独立しようと運動が高揚した時期に、バンボー家は、後のモンゴル人民共和国領土となるところで幕営していた長男のエルチンボーを頼って、移ってきた。E.チメッドツェレンの父エルチンボーは、平凡な牧民バンボーの長男として生まれ、モンゴル文字や満洲文字を読み、ロシア語がわかる人であった。モンゴル人民共和国ドルノド県ダシバルバル郡のヤマルフという土地で幕営し、郡で最も多くの家畜を飼う遊牧民の一人として数えられていた。

父エルチンボーは、モンゴル人民革命党の 1930 年代の急進的な集団化政策に対して、積極的に推進する活動をし、大日本帝国と戦う祖国防衛戦争では畜産物などを調達支援していたので、モンゴル人民革命党機関紙「ウネン」で表彰されるような人であった。しかし、1938 年のモンゴル人民革命党の粛清によって反革命勢力として逮捕され、処刑された。

<sup>3</sup> 今岡良子 (2005) 「モンゴル国における女性研究の動向と研究紹介」、「アジア現代女性史」創刊号、P.P.5-6

その頃というと、父エルチンボーが住むドルノド県では、1933年に「ルフンベ事件」が起こっていた。彼は、ブリアート人で、ドルノド県の人民革命党書記であったが、日本のスパイという免罪によって、さらに関係者と見られた317人とともに逮捕、拷問された。O.ダーリーマーによると、「これが大粛清の始まりであった。ロシア革命から逃れたブリアート人、モンゴルの東部と内モンゴルとの国境地帯にまたがるように住んでいたことを理由に『日本のスパイ』という容疑がかけられた」<sup>4</sup>と書いている。また、Ts.ツェツェグジャルガルは、「1932年から1940年に反革命という理由で、28,451人が冤罪事件で逮捕された内、20,822人、つまり73%が銃殺された。」<sup>5</sup>と述べている。この背景には、革命の主要人物の一人で唯一生き残ることができたKh.チョイバルサンに権力が集中する時期、大日本帝国軍と満洲国軍による国境侵犯の挑発が重なった時期、それに対しKh.チョイバルサンはソ連と相互援助議定書を交わして対抗しつつ、スターリンの支配を受け入れていく時期が重なっていた。

そして、父エルチンボーが政治的粛清を受けた後も、遺族が生きた茨の人生こそが、当時のブリアート人の秘史そのものであった。

1968年に父エルチンボーの名誉が公式に回復され、その10年後の1978年にE.チメッドツェレンはこの手記「私の三世代の歴史」を書いた。その間に、1973年にE.チメッドツェレンの単著『モンゴル人民共和国における女性を社会的抑圧から解放した歴史的経験』が出版されたが、そこには1930年代の粛清のことは一切書かれておらず、モンゴル人民革命党の反革命勢力との闘いが書かれている。手記「エルチンボー・チメッドツェレン 私の三世代の歴史」には、働き者で、真っ直ぐで、誠実な性格で、子どもたちに学ぶことを積極的に薦めてくれた父が、1938年に「政治的事件」の容疑で逮捕され、その後、消息がわからなくなった。それは、(ソ連とともに大日本帝国軍と戦う)チョイバルサン元帥一人に全権を集中し、革命の本来の路線を歪めたことが原因であると書いている。父親は、無実の罪に問われた一市民であったと書いている。

このように自分の家族の秘史から政治的粛清を批判し、父の正義を言葉に表したのが「エルチンボー・チメッドツェレン 私の三世代の歴史」という手記であった。彼女は、粛清について、事実にもとづいて書いていたのである。最後に、「1978年12月19日に『歴史の真実を記した。』」と結んでいる。

---

<sup>4</sup> 今岡良子 (2019) 前掲書、P.86

<sup>5</sup> 今岡良子 (2019) 前掲書、P.87

---

 <翻訳>

## E.チメッドツェレン

## 「エルチンボー・チメッドツェレン 私の3代の歴史」

**祖父の歴史**

私の祖父バンボーは、1862年にブリアド民族の地、シネヘンというところで生まれた。ブリアド民族出身である。牧民であった。のちにロシアと清朝の国境を定める頃、私の祖父の土地であるシネヘンというところは、清朝の土地に入ったのだった。祖父は3人の息子がいたが、長男である、私の父、エルチンボーについて、私たちの土地にやってきた。私たちの祖父は旧文字<sup>6</sup>と満洲文字を知っていた。僧侶の反革命運動に関わらず、バロンウンゲルンの白衛軍にも関わらず、普通の牧民として暮らした。そして、1944年の冬に亡くなった。

**父の歴史**

私の父エルチンボーは1892年にシネヘンというところで牧民バンボーの最初の息子として生まれ、家畜の仕事をしていた。1930年から33年まで遊牧の集団組織ハムトラルの代表、小規模な消費者組合のホルショーの代表などの仕事をしてきた。読み書きができた。また、ロシア語がわかる人だった。バロンウンゲルンの白衛軍には入ったこともない。私の母ミヤダグと家族として暮らしていた頃、モンゴルとロシアの国境が定められ、私の父母が暮らしていたところは、我が国の領土に含まれることになった。父は、遊牧の集団化組織ハムトラルの代表や小規模の消費組合の代表を務めたり、また労働組合員でもあった。1938年に祖国の防衛に積極的に支援したことで、モンゴル人民革命党の「ウネン」紙上で表彰された。元々働き者で、真っ直ぐで、誠実な性格で、私たちが本を読み、学ぶことを積極的に勧めてくれる人であった。1938年の「政治的事件」で逮捕され、その後、消息が途絶えた。これは、ちょうど一人の人間に権力を集中したことから革命の道筋を歪めたことによる被害だった。だから、私は父親を無実の罪に問われた一市民であったと考えるようになった。

私の母ジャンバル・ミヤダグは、1900年にソ連の領土のチタ市の近くでジャンバルの2番目の娘として生まれた。家畜の世話がうまく、手先の器用な女性で、モンゴル文字はあまり読めないが、ロシア語ができる人であった。母は、謙虚な性格で、仕事熱心で、真っ直ぐで誠実な性格な人であった。8人の子どもを産んで、父が事件で引っ張られてからは、私たちが教育し、学校を卒業し、文化的な暮らしを全うするために、一人で背負ってくれた素晴らしい母であった。母は1950年の夏、病気で亡くなった。

**私自身の歴史**

私自身、ドルノド県ダシバルバル郡のフフ・オールというところで、1924年の春にエルチンボーの最初の娘として生まれた。10才まで両親の手で教育を受け、1934年にバヤ

---

<sup>6</sup> 旧文字とは、モンゴル文字のこと

ンドゥン郡の小学校に入学し、学んだ翌年、ゴルヴァン・ザガル郡の小学校が設立され、2年生に入り、学んで1936年にドルノド県の中心地にある中学校に入り、1940年には8年生を優秀な成績で卒業した。そして、1940年から41年に師範学校で学び、中等のモンゴル語の教員の専門を身につけ、この間、師範学校、財務学校、ドルノド県の中心地の10年制学校で1949年までモンゴル語の教員として働いた。1949年にはモンゴル国立大学に入学し、1953年に卒業し、1953年7月1日から1954年1月18日までモンゴル人民革命党中央委員会で宣伝員として働き、1954年1月18日から今日まで現在の大学の教員、専攻の代表などの職務についた。例えば、1974年から78年1月まで大学附属の社会科学教育指導事務局長として働いている。1978年1月から現在までモンゴル国立大学社会科学学科のモンゴル人民共和国の歴史学専攻の代表として勤めている。

1957年から1962年にはモンゴル人民共和国の北京大学の院生として学び修士号を取得した。1936年にはモンゴル革命青年同盟、1941年6月にはモンゴル労働組合、1947年11月19日にはモンゴル人民革命党の党員となった。この間、「政府の尊敬すべき表彰」、「人民革命40年、50年記念の労働メダル」、修士号、モンゴル女性委員会のメンバーとして、何度も表彰された。

入党してからほとんど途切れることなく、党の細胞、委員会の幹部に選ばれ、1972年から74年に国立大学の社会科学教員の党細胞の事務局長として選ばれた。

私は1955年にインドで平和会議、1965年にフィンランドの世界平和大会に代表として参加した。私は、1969年にベトナムで女性委員会の代表として1974年にベトナムで国際会議に代表として参加した。1972年に英国のリーズ大学でモンゴルの歴史、言語を教える教員として一時滞在した。私には家族がいて、夫であるTs.ジュグデルは師範大学の教員、息子J.ボルにはもう学生になる子どもが二人いる。一人は、ズーンハラーのアルコール工場の実験室の代表、一人は博物館の指導部で、二人とも学歴が高い。私はロシア語と中国語を読んだり、話したりする。英語は独学で身につけた。政府や党の諸機関から何一つ批判を受けることはない。私の3代にわたる歴史を簡単に書きました。

1978年12月19日に「歴史の真実を記した。」

---

1957から1962年、北京大学の修士課程で学ぶ  
E.チメッドツェレン



J.ボル提供

この手記は、三世代と書かれているが、父の正義を示すために構成されている。祖父のことは、父が遊牧民として生まれ、読み書きができた普通の人であることを述べるために書かれている。自分自身のことは、その輝かしいキャリア紹介するために書かれたというよりも、遺族に強いられた茨の道については書かず、誠実に一生懸命学問の道を生き、女性の地位を高める運動によって社会を牽引し、国際的な平和の連帯にも力を入れ、そうして得た社会的地位と信頼によって、父の遺伝子が生き続けていることを証明しているように思えた。

次に、J.ボルが「私の母 思い出」という手記に、母が書かなかったことを書き加えているので、それをピックアップしてみたい。

1つ目は、祖父エルチンボーに対する公式の名誉回復について、2つ目は、遺族の貧困と遺族を背負った母の苦労について、3つ目は、母の癒えない心の傷について、4つ目は、母が70年代に政治的抑圧を受けた知人の側に立ったこと、5つ目は、母が美しいものが好きで、夢中になって手作りしていたこと、その他、母として、教師としての思い出が随所に書かれている。

1つ目の1968年に公式に名誉回復が行われたことについて、小さな紙をもらっても、命が戻るわけではなく、遺族の心に残した傷について、繰り返し厳しく批判している。

2つ目は、母は8人兄弟の長女で、祖父が亡くなった後、17才で祖母を支えて家族を守ったが、4人の弟妹が貧困と飢えのために亡くなった。祖母は、長女のE.チメッドツェレンだけでなく、他の子どもたちを大学に進学させた。他人に預けざるをえなかった妹も、レニングラードの芸術大学を卒業し、E.チメッドツェレンは、のちに育ての親とともに引き取り、祖父エルチンボーの遺族の繋がりを大事にしたことを述べている。

3つ目は、ウランバートルで学び、教師の資格を取った母が1949年に読み書きの教員と



して、ドルノド県の中心地の学校に赴任することになった時、母は県の中心から住み慣れた故郷に行こうとしなかった。その挙動から、祖父が処刑された心の傷が癒えていないことを推察している。

4つ目は、1970年代の初めに起こった「知識人の迷い」という名の国家権力による知識人に対する弾圧の時、多くの学者、知識人が粛清されたが、同僚の学者や同級生に会い、彼らを助けるだけでなく、子どもたちを自分の教室で働かせるなどして支援をした。それは、大変勇気のいる行動で、党政府の偏った政策を批判する態度を取り続けたと書いている。

5つ目は、母が美しいものを好み、手作りすることで、心の安らかさを保っていた。ハンカチ、枕カバー、ベッドカバー、布団袋、ベッドやソファーなどに刺繍し家中を飾り、モンゴルデールや赤ちゃんや子どもから全ての年齢のシャツ、ズボン、ボイトグ（子どもの靴）を縫っては、プレゼントしていた思い出である。

このように、J.ボルは、母が書かなかったことを息子の目を通した記憶で補っている。特に、5つ目の美しいものが好きで、自ら手工芸を楽しんでいたことは、最後の著作『モンゴル女性の知識に関する伝統と進歩の問題』の中で手工芸について丁寧に書いたことにつながっていく。

一人息子J.ボルに教える  
母E.チメッドツェレン



J.ボル提供

## &lt;翻訳&gt;

## J.ボル

## 「私の母 思い出」

私の母の祖父母バンボーは1862年にブリアート人の住むシネヘンというところ、牧民の家庭で生まれた。小さい頃から家畜の仕事をし、母語のモンゴル文字、満洲文字の読み書きができた。またロシア語を少し理解していた。

帝政ロシア、清朝が2つの国の境を定める時、祖父母が生まれた土地シネヘンは清朝の下に入った。モンゴルの民族独立のための、1911年から1912年の運動が高揚した頃、父方の祖父母は、モンゴルの地で暮らしていた長男エルチンボーを頼って移住して来た。父方の祖父母には3人の息子がいたという。妻は早く亡くなったため、この長男エルチンボーを頼ってきたのだろう。息子の家族と一緒に暮らし、家畜を飼って助け合い、私の母と妹たちを育て、教育することに大変熱心で、満洲文字を教えていたという。誠実で真っ直ぐな性格で、大変勤勉な人だったという。普通の遊牧民として1944年の冬に亡くなった。

図1 ドルノド県の位置



私の祖父（つまり母の父）エルチンボーは1892年にシネヘンというところ、牧民バンボーの最初の息子として生まれた。子どもの頃から家畜を飼い、運搬の仕事などをしてきた。自分の父バンボーから母語のモンゴル文字、満洲文字を習った。私の祖母（母の母）ミヤダグと結婚し、自分の家を持ち、ヤマルフという土地に幕営している時にモンゴルとロシアの間の国境が決められ、父と母の幕営していた土地は、モンゴル領になった。そして、現在のドルノド県のダシバルバル郡の地となるヤマルフという土地に幕営している時に、1931年に地方行政の区画を改定した頃、ダシバルバル郡から多くの家族がゴルヴァン・ザガル郡に移住した。このころからゴルヴァン・ザガル郡の管轄下に入った。

私の祖母ミヤダグが1900年に現在のロシアの地のアガという地<sup>7</sup>にジャンバルの2番目の娘として生まれた。子どもの頃から家畜の世話をし、私の祖父エルチンボーと結婚した。モンゴル文字はなんとか読めるぐらいであったが、ロシア語はよく理解していたので、病院で時々通訳をしていた。謙虚で、真っ直ぐで誠実な性格で、仕事熱心で、手先の器用な女性だった。8人の子どもを産んだ。

図2 チメッドツェレンゆかりの地



<sup>7</sup> 現在のザバイカリエ地方

祖父母は1930-32年にはハムトラル(遊牧業の集団化による生産組合)の代表、1936-38年にホルショー(小規模な消費組合)の長などの公務についていた。ロシア語を理解し、仕事熱心で、正直で真っ直ぐな性格で、どんな仕事にも積極的に取り組むことから、故郷では有名な人であったという。祖国を発展させる事業のために自分の家畜を提供していたので、1936、37年には国から表彰されていた。1938年に祖国を防衛する事業を積極的に支援したということで、モンゴル人民革命党の機関紙「ウネン」紙で表彰されたことについて書かれていた。郡では家畜の多い遊牧民の一人であるだけでなく、草刈りをする、家畜の囲いを作るなど、積極的に牧畜を行っていたということで、納税を軽減されていたという。

ソ連のボルシェビキやコミンテルンの圧力や要求が、モンゴルの民主的な法律を歪め、Kh.チョイバルサンの国の赤い殺戮の悲劇が、1938年と39年に生まれた。多くの人の伝えるところによると、逮捕され、処刑される時に、私の祖父(私の母の父)エルチンボーは1938年に「政治犯」という冤罪によって捕まえられ、銃殺にされた。

祖母は、祖父が逮捕された後、1939年にソ連との国境の町チョローホロト郡のエレーンツァブ病院の看護師、ドルノド県ブスノールの中継地で通訳、家畜の焼印係などの仕事をしていて、祖父が冤罪による政治事件で連行された後、父親を失った子どもたちを育て、しつけ、学校を卒業させる義務を一人で担った素晴らしい母であった。1950年の夏に病気で亡くなった。

祖父は1968年に名誉回復されたが、幼い子どもの時に孤児になった辛い悲しみを本人の心から跡形もなく拭い去ることができようか、その名誉回復の文書で? 政治の恐るべきテロリズムの厳しい殺戮に人生のまだ幼い時に直面し、思いもかけず孤児になった子どもの心に傷をつけた悲しみや辛い涙を何もなかったかのように洗い流すことができようか、その紙で? 心に深く残った傷痕、恐怖、冷酷さをなくすのと同じ紙が治療し、癒すことができようか。父の(母の)愛で満たされない小さな娘や息子の目に記憶された父の輝かしい姿を伝え、変えてあげることができる魔法だったのか、その紙は? このように聞きたくなったが、実際に、誰の顔の方を見て、誰から聞くのか。「鉄の顔をしている政治」に尋ねて 全く根拠のない答えを得ることでいいのか?

母は名誉回復のその小さな紙を家に持ち帰り、自分の手に取り「命を奪った後で、千人も冤罪はどうできるというのか」と悲しい顔で小さな声で呟き座っていた。そのようにして、厳しく残酷な政治、野蛮で、醜悪な暴力に向き合った時から父と早く別れ、亡くし、心に悲しみを抱いたことを、私は母の目を通して見てきたのである。このような政治によるテロリズム、残酷な政治の暴力の黒い影が私の心をも掴み、放さなくなったのである。

私の母、E.チメッドツェレンは、西洋の暦によると、1924年3月8日の頃にモンゴル人民共和国のドルノド県ダシバルバル郡のフフ・オールというところで牧民B.エルチンボーの長女として生まれた。10歳まで両親の下で育てられ、遊牧の仕事を手伝い、1934年にドルノド県のバヤンドゥン郡の小学校に入り、一年間勉強した。そのあと、自分の家族の所属している郡のゴルゲン・ザガド郡で小学校が開校したので、そこに入学し、一年勉強して、1936年にドルノド県中心地の中学校に入り、1940年に8年生を優秀な成績で卒業し、さらにウランバートルに行き、1940-41年に師範学校の中等クラスを卒業

し、読み書き指導の資格を取り、師範学校、財務学校で勉強した後、ドルノド県都 10 年制学校で 1949 年までモンゴル語の読み書きを教えることになった。

1949 年にモンゴル国立大学に入学し、1953 年に卒業し、1953-54 年にモンゴル人民革命党中央委員会で宣伝員、1954 年から 1998 年までモンゴル国立大学教員、学科長として勤めていた。1957 年から 1962 年には中国の北京大学の大学院で学び、歴史学の修士号を取得した。政府の尊敬する表彰、革命記念のメダル、労働英雄のメダル、モンゴル国立大学の修士号と名誉教授の称号が与えられた。

1955 年にインドで平和会議、1965 年にベトナムでモンゴル女性委員会の代表として、1974 年にはベトナムに国際会議の代表として参加した。1972 年に英国のリーズ大学でモンゴルの歴史、言語の客員教授として勤めた。ロシア語、中国語を読み、話し、英語も独学で学んだ。

祖父がいなくなった後、母は師範学校で学ぶために、母、母方の祖父、7 人の弟妹を連れて、首都へ移住した。実際には、心と心臓が震えるほどの恐怖と冷酷な故郷を振り返ることなく、逃げて行きたかったのだと思う。このように 17 歳の、黒い影を落とした娘の痩せた肩の上に、家族全員の運命を背負わせることになったのである。しかし、家族 10 人が信頼する幼く、痩せた、小さな体の女性が、その重い荷物を平常心で背負い、気持ちを強く持って乗り越えたのだ。私は、1944 年からこの荷物を一緒に背負うことになったのである。

母は弟や妹たちを何よりも、誰よりも大事にし、いつも背負うように離れず世話をしたが、残念ながら貧困のため、4 人の弟と妹を亡くしてしまった。しかし、その大きな使命を心に抱いて、困難を乗り越えていった。私が物心ついた時、母の弟や妹は 4 人になっていた。彼らは全て高等教育を受け、また、家族を持つようになったが、彼らは私を何よりも愛してくれたことをよく覚えている。亡くなった母の弟や妹たちを思うと、今でも胸が締め付けられる。

今思うと、母は 1944 年ごろ、ドルノド県へ行き、チョイバルサン市の 10 年制学校で教師として赴任する時、どれほど深い傷や苦悩を心に持って行ったのかと思う。これを母は県の中心地から故郷の郡に再び行こうとしないことが証拠だと私は思っていた。母は、生まれた土地、そのソムに行くと、必ず心の傷が再発すると思ったのだろうか。私が 6、7 才のころ母と私はチョイバルサン市に行ったけれども、県の中心地から先には行かず、戻ってきたのだった。

母は、大学で学ぶためにチョイバルサン市からウランバートルに戻ってきた時、母は弟たちだけでなく生活のために他人に（独り身の女性に）預けた妹を育ての母とともに受け入れ、引き取った。母は全ての弟たちとどんなことがあっても心が一つであることを示そうと努力していたのである。母の妹を育ててくれた育ての親は、母の妹がレニングラードの芸術大学を卒業してきて独立するまで、私たちのところに住み、家事をし、両親が仕事に行った後の私の世話をしてくれたのである。

母はとても広く知識があり、教養のある学者らしい人であった。私には学問は弛むことなく精進することを常に教え、「息子よ、本を買うのにお金を惜しんではダメだよ」と言ってくれたものだ。母は、もし私が物事を完璧にこなしたら、そこで終わらず、なぜそのようになったか根元から考え、理解するよう示唆してくれた。「お前が、もし、物事

の中身の質を根本的に理解することができないなら、そこの浅い、偽物の知識にすぎない」と教えてくれた。「果てしない学問の海に常に努力して、泳いでいきなさい」と母は教えてくれたのである。

母は、年号を覚えるのが得意で、物事を忘れて戸惑うということが全くない人であった。読んだ本のページごとに意見を書き、自分のものにしていった。また大学では、全ての学生たちの氏名だけでなく、出身地域を覚えていた。そして、卒業生がどこで、どんな仕事をしているかを間違わず、正確に覚えていた。人と一度知り合うと、顔を覚え、どこで、どんなふうに出会ったかも覚えていて、他にもまつわる情報を色々記憶していた。母の情報収集の能力は、驚くほど高く、また忘れないので、人と話している最中も、質問して確認し、さらに面白そうなことを聞き出し、情報を得ていた。

母は美しいものを好む人であった。何か美しいものを集め、芸術的な作品、手工芸のものを見て気持ちがたかぶり、ストレスを解消するのが好きだった。子どもの頃、白い布の上にいろいろな色の糸で、母は民族の模様を刺繍したり、ハンカチには花や葉の刺繍をしたり、枕カバー、ベッドカバー、タンスの取手、布団袋、ベッドやソファなど飾る刺繍もし、家のあちこちに母が刺繍したものがあつた。またモンゴルデールを縫うのはとても上手だった。赤ちゃんや子どもから全ての年齢のシャツ、ズボン、ボイトグ（子どもの靴）をその体に合わせて縫って、プレゼントするのが好きだった。

母は人の心を自分に上手に惹きつけることのできる人だった。誰からもすぐに信頼されていた。非常にオープンな人だったので、人とすぐ知り合い、親しくなることができ、一旦知り合うと昔からの知り合いのようになっていた。アパートのみんなと知り合いで、仲良く、その子どもたちまでうちに出入りしていた。特に、近隣の全ての年齢の女性たちが、いつもそばに集まっていた。彼ら全てに対してどんなことでも協力し、頼み事があれば、必ず、応じてあげていた。

母は、とても勇気があり、議論好きな人であった。私は母が何かを恐れ、何もせずにいるのを見たことがなかった。なんでも自分の視点で見て、勇敢に、反対意見を述べることができた人である。1970年代の初めに起こった「知識人の迷い」<sup>8</sup>という名の国家権力による多くの学者、知識人に対する弾圧の時、被害にあつた学者や同級生、そしてその子孫が困っている時、勇気ある母は会いに行き、彼らを助け、それだけでなく、子どもたちを自分の教室に教師として働かせていた。この態度によって、母は、党や政府が行つた偏つた政策を批判し、反対していたことを示していた。母は有名で、一定の影響を持っていたので、誰も、止めることもできず、自然にその言葉に従うようになっていたのである。

母は厳格な人で、常に理想が高く、とても正直な人であった。学生たちは高い理想を求めて、責任を持って教え、立派な研究者になるように自ら努力して指導していた。私が一人息子だからと言って、甘やかし、家の仕事をさせず、その結果を甘く褒めることはなかった。私には生活に必ず必要なことになる、また、遊牧の暮らしの非常に多くの

<sup>8</sup> 「知識人の迷い」とは、ソ連のスターリンが亡くなった後、スターリン批判によって次のフルシチョフが権力を握つた時、モンゴル人民共和国においても、知識人に自由に党政府の批判をさせ、党政府に都合の悪い意見を言う知識人を識別することが行われた。1930年代の大粛清の後、50、60、70年代に起きた。

ことを小さいころから途切れることなく教えてくれた。その全ては私にとって現在までずっと必要になったと喜んでいる。

母は、とても才能があり、どんなことも早く覚え、自分のものにすることができた。小学校で学んでいるロシア語を独学で覚えた。北京大学の大学院生で学ぶ時、中国料理のほとんど全てを覚えてしまった。また、1970年代に英語を独学で覚えた。

---

J.ボルから送られた母の手記、筆者のために書いてくれた手記をエネルギーにして、筆者は、『自由と自在、平和を希求したモンゴル人民共和国の女性たちの現代史』の仕上げに取りかかる。